

# 「アウグストゥスの宗教復興」に関する一考察

—古代ローマ帝政初期（アウグストゥス時代）の宗教事情について—

小堀 馨子

## 1. はじめに

古代ローマ帝政初期のアウグストゥス時代とは、初代皇帝アウグストゥス（前63～後14）が前27年に「アウグストゥス（至尊者）」という称号を元老院から受け取ってより、彼の死までの紀元前後の四十年間を指す。

紀元前二世紀以降ローマは、地中海のほぼ全域を支配下に治めていた広域型世界国家に成長し、地中海世界は、属州化という形を取ってローマ国家の支配下に組み込まれた。その結果、ローマには数世紀に亘って属州から様々な文物のみならず、属州各地の、殊に所謂“東方”からの宗教も流入した。例えば、キュベレーなどの小アジアの神々の祭儀、ギリシャから来たディオニュソス祭儀、イシス・オシリス・セラピスの祭儀、ミトラス教、ユダヤ教、キリスト教等がある。

これらの宗教の特徴、特にローマに受容された時の機能に着目した場合に目につく特徴を見ると、程度の差はあるが、受容者が一個人として救済されたと感じ易い宗教であるということが言える<sup>(1)</sup>。そこで当然、何故にこの時期にローマの人々が個人本位の救済を受けることが期待できそうな宗教を求め、またその宗教はどの程度普及したのか、という一つの疑問が生ずる。しかし同時に、当時、従来の伝統的宗教はどのような役割を果していたのか、そしてそれは外来宗教にその地位を譲る程に全く魅力を失ってしまったのだろうか、という第二の疑問も湧いてくる。

そこで、後者の疑問に答えるのに相応しい事例として取り上げるのが、本論文で扱う「アウグストゥスの宗教復興」である。これは一言で言えば、ローマに帝政を樹立した初代皇帝アウグストゥスによる、伝統的宗教の復興である。しかしそれは単なる古来の祭儀・思想の復活ではなかった。当然時代に合った、それ故、古きものにはなかった新しい要素も付け加えられていた。

しかし、何ゆえにこの時期にローマの人々が個人本位の救済を期待させる宗教を求めたのか、一方、当時に伝統的宗教の果していた役割はどのようなものだったのか、という疑問に説得的に答えられるような、ローマの伝統的宗教に関する本格的な研究は、殊に日本では数少ないように思われる<sup>(2)</sup>。勿論、宗教に関する分野は、碑文資料や文献資料だけでは捉えにくく、古代を扱うゆえの資料的制約が大きいことは否めない。そこで本稿では社会史的背景に立脚しつつ人間の心をも捉えられるような古代ローマを対象とする宗教史学の可能性を示唆しつつ、具体的資料に基づき、帝政初期のローマにおける「アウグストゥスの宗教復興」を検討したいと考える。

## 2. 「アウグストゥスの宗教復興」の定義と理念

### (1) 「アウグストゥスの宗教復興」の定義

「アウグストゥスの宗教復興」とは、アウグストゥス以前の内乱期に廃れてしまった祭儀や神殿を初代皇帝アウグストゥスとその統治時代を通じて復興していったという歴史上の事象、即ち

彼の統治時代の宗教政策を指す。

この問題は、我が国においてのみならず、欧米においても従来宗教に関わる問題というよりは寧ろ政治問題として扱われることが多かった。彼の復古的宗教政策は専ら皇帝が権力を自らに集中して行く過程で施行されたものであり、体制維持の目的から宗教の統合機能を権力によって意識的に操作する<sup>(3)</sup> 人工的なものでもあった。従ってアウグストゥスは共同体祭祀の再統合を新政治体制の権威づけの方向でおしすすめた<sup>(4)</sup> 人間であるという解釈は今なお広く行き渡っている。しかし、このような解釈だけでは、時代の流れの中でそこにどのような宗教的な「場」が生じたのか、ということが浮かび上がって来ない。

本論文では、「アウグストゥスの宗教復興」を皇帝崇拜という普遍的な観点から論じることは控え、又、比較宗教学的な立場はとらず、「宗教復興」<sup>(5)</sup> という観点から考える。その場合、それまでの所謂「伝統的」宗教理念と歴史的状況の中での変化とを押さえ、また、「復興」された宗教の古い要素を保持している点と、新しく付加された要素とを把握することによって、「アウグストゥスの宗教復興」の生じた「場」の解明を試みたい。

## (2) 「アウグストゥスの宗教復興」の理念

アウグストゥス時代とは、ユリウス・カエサルの養子オクタウィアヌス、後の初代皇帝アウグストゥス（前63～後14）が前27年に「アウグストゥス（至尊者）」という称号を元老院から受け取ってより、彼の死までの時代を指す。一次史料としては“CIL”<sup>(6)</sup>、取り分け碑文『神君アウグストゥスの業績録』<sup>(7)</sup>がよく使われるが、スエトニウス、ディオ・カッシウスらの著作も得るところの多い二次史料である。

これらの史料から、アウグストゥスは自らの統治理念として、「祖先の良風美俗の復活」を掲げていたことが分る。そして彼の宗教政策<sup>(8)</sup>もこの理念に基づいて行われた。ではこの「祖先の良風美俗」とはいかなるものだったのか。

ローマ宗教を支える思想としては、千二百年にわたって、ローマ宗教を貫いて支配していた思想であるレリギオー（religio=慎しみ；「宗教」という語の語源）及びピエタース（pietas=敬虔）という観念がある。この二つの観念は、ローマ人を理解し、またアウグストゥスが立ち戻ろうとした伝統的思想を考察する際に重要である。

ローマ人は非形而上学的傾向を有し、歴史的且つ直接的な現実性に対して強い関心を持っていた<sup>(9)</sup>。現実性に対する関心は、ローマ社会が原初は農耕社会であり、自然現象や季節の周期の念入りな観察が必然の要請であったことから生まれたものであろう。この関心は、一方でローマ人が年周期の規則性や季節の秩序ある繰り返しといった自然の規則性や秩序の内に理想の規範を見てとり、他方で天変地異・非日常的現象（例えば怪物が産まれたこと、石の雨が降ること）などの規範・秩序を乱す異常事に対する嫌悪・畏怖を生み出すこととなった。ローマ人にとって、これらの異常事は即ち神々と人間との関係の危機を意味していた。ただし、イスラエルの預言者がこれらの異常現象がそのまま神の怒りを表していると考えたのと異なり、ローマ人は、天変地異はそのまま何らかの意味を直接明示するものではなく、あくまで天の意志を暗示する予兆であり、そこから天の意志を正確に読み取るには専門家の判断を要する、と考えていた。そして、ローマ

人にとっては天変地異を含む異常な現象こそが神々と交流を持つことができる契機であった。言い換えれば、ローマ人は具体的・個別的・直接的なもの—自然現象や人間の活動、歴史的事象などを宗教的に価値付けたのであった。

この個別性・具体性への関心は即ち儀礼の増加と細分化を促進する。つまり、全ての神毎に固有の顕れ方を予め詳細に認識し、現に起こった現象がどの神のどんな意志の顕れであるのか検討・判断し、その結果どの儀礼がその神のその意志に対して有効であるのか選定して、その儀礼を執行せねばならないからである。更に、神々の意志が多面化して顕れるようになると、その一つ一つがまた独立の「神格」として見なされるようになり、ますます神々の数は増えて行く。しかし、神々の数の増加と神々の個性化とは相関関係にはなかった。それどころか、「神格」の数が増えれば増えるほど、一つの神格の機能は限定されて役割が狭小となり、その個性は弱体化する<sup>(10)</sup>。つまり非個性化が進むのである。

そうなるとローマ人は複数の神々を人格神として認識しつつ拝していたのではない、ということになる。つまり、エリアーデやケレーニイの見解を基にして考えてみるに、ローマ人は、神々を個性を有するものとしてではなく、ただ神々の存在と、その神々が意志を有していること自体に価値を置いていたのであった。エリアーデは「ローマ人の特異な宗教性は、そのプラグマティズム、効率の追及、そしてなかでも家族、部族、故郷といった有機的な共同体の「聖化」を特徴としているのである。」<sup>(11)</sup>と述べている。このようにローマ人は、その中に自律的且つ有機的な連環を有しつつ、総体として存在する細胞のような組織、つまりシステムへの関心が強かったのであり、そこで個々の神的存在よりも、システムとしての神的存在の総体を重んずる、という心的姿勢になったのではなかろうか。このことはローマ人が常に神の意志、即ち神意(ヌーメン; numen)を殊に重視していることから傍証されるであろう。ケレーニイは、「(引用者注; ローマ人の思考は)万物は神々による統治、支配に服従している、いや、より詳しく言えば、すべては神々の〈神意〉numenによって統治され、支配されている、という考えである」<sup>(12)</sup>と述べている。この神的存在の総体に対してローマ人は、それが表に顕す徴—表徴を畏んで読み解こうとするのである。そしてこのことがつまり正に「慎しみ」(religio)なのである。

もう一つのピエタース(敬虔)はレリギオーの同意語であるとローマ人によって考えられていた。ローマ人が考えていたピエタースの意味は、神殿の建立伝説に纏わる有名な伝承から最もよく窺える。即ちピエタースの神殿が建っている場所は、「かつて牢獄に投ぜられて憔悴してしまった母の命を娘が自分の乳房で養った場所である」<sup>(13)</sup>と伝えられているのである。ケレーニイによれば、この伝承の特異性は、その行為が肉体的なものであると同時に精神的なものでもある、ということである。彼は「ここでは〈ピエタース〉は、与えかつ受けとるという全く自然な相互関係において完結した世界を、絶対的な形で示しているのだ」<sup>(14)</sup>と述べている。つまりここで重視されているのは人間同士の自然な—つまり規範に従った正しい—関係である。人間同士の自然な関係とは、即ち例えば父親からの子に対する正しい愛情であり、息子にとっての父への服従である。不服従は自然の秩序に反した忌まわしい行為であり、不敬虔である。このような〈敬虔〉を拡大すれば神々の意志に対して畏み慎しんで服従する態度となる。

この神々に対する〈敬虔〉は一方で自らの属する共同体に対する、都市国家に対する、そして

人間全てに対する〈敬虔〉になる。ここに、人間関係に重きを置くローマ宗教の姿が明らかになるであろう。

しかし、このローマ人の思考がシステムに重きを置いているということは他方で重要な問題を孕んでいる。システムを重視するということは、共同体の秩序を重んじるということであり、即ち個人の軽視に結び付いた。ローマに特徴的な原理として有名な“誓約に対する忠節”，国家に対する献身，法律の有する宗教的にも近い権威は，システムの重視及びそれと表裏の関係になる個人の軽視という現象を考えたときに，最も理解しやすいものとなる。ヘレニズム世界の中で辺境に位置を占め，後進国として出発したローマは，周囲と隔絶・遮断されていない状況において絶えず周りに働きかけ，且つ周りから影響を受ける適度な流動性が活発であって，誠に効率よく動いている一つのシステムであった。先にエリアーデの言葉を引用して効率性に言及したが，この点でもローマ人はシステムの効率性を重んじた，ということは即ち流動性の活発化に対して柔軟に対応したのである。そして正にこの柔軟なる対応の故に，東方宗教の流入を許すことになる。属州の拡大に伴い，東方宗教が，中でもとりわけ個人の考察に焦点を当てているギリシャ哲学がローマに流入し，続いてオリエントの救済宗教が入って来たときに，“個人”に気づいたローマ人の目には，このローマ宗教のシステム重視的，共同体中心的性格が大いなる欠点と映った。

以上，アウグストゥスが立ち戻ろうとした「祖先の良風美俗」を考察した。それは一言で言えば，第一に神々若しくは神的存在に対して畏れかしこむという正しい関係に入ること（レリギオー），そして第二に人間の間柄も自然で正しい関係に入ること（ピエタース）である。そしてアウグストゥスが掲げた「祖先の良風美俗の復活」という理念は，破壊され，失われていた神的存在及び人間同士のあるべき関係性を回復しようとする試みであったと言える。

### 3. 「アウグストゥスの宗教復興」の実態

ここでは、「アウグストゥスの宗教復興」の実質的内容を略述し，その中で重視すべき特徴を検討したい。

「宗教復興」の実態は，第一に古いものを復興したという点としては，荒廃した祠の修復，新しい神殿の建立，空位であったユピテル神官の地位の復活，ルベルクス団といった幾つかの信徒集団の復活，鳥占いの儀式といった祭儀の再建などが挙げられる。神殿を再建し，祭儀を復活することは，アウグストゥス及び当時のローマ人にとって，神々との関係性回復を示す具体的行為であった。

アウグストゥスが『神君アウグストゥスの業績録』で自ら建てたとしている神殿は，パラティウムの柱廊附属アポロン神殿，神君ユリウス神殿，ルベルカル，カピトリウムの征服者ユピテルと雷神ユピテルの神殿，クイリヌス神殿，ミネルヴァ神殿，女王ユノ神殿，アウエンティヌス丘の自由ユピテルの神殿，聖道（ウィア・サクラ）の一番高い所のラレス神殿，ウェリア丘のペナテス神殿，若年（ユウエンタス）の神殿，パラティウムの大地母神の神殿（以上公有地に建設），復讐者マルスの神殿（以上私有地に建設）であり，その他首都の八十二の神域を修復した。帝政期の間，大半の公共神殿の建設や再建は皇帝が後援者になって自分の財産から支弁した。アウグストゥスの場合も，復讐者マルスの神殿を含む十六の神殿の建設費用と，八十二以上の神殿の修

復費用とを自分の財産で支払ったとスエトニウスは記している<sup>(15)</sup>。この他にアウグストゥスの意向を受けて、側近の人々が奉獻した神殿も多い。神殿の再建はアウグストゥス及び当時のローマ人にとっては、神々との関係性回復を示す具体的行為であった。ここでは下線を引いたアポロン神殿とマルス神殿の存在に留意したい。

またアウグストゥスが復活させた祭儀全てを再現することは史料的に不可能だが、スエトニウスの著作から一部がわかる。それは、前述の健康と安泰の神サルスに捧げられる鳥占いの儀式、ユピテル神官団の勤め、ルペルクス祭の他に、世紀祭、辻祭(ラレスの祭儀)などである。また、ウェスタの巫女の特典を増やし、カエサルが定めた暦がその後無視された結果、暦日の秩序が混乱に陥っていたのを元に戻したのもアウグストゥスである。スエトニウスはアウグストゥスが聖職の数と尊厳と恩典とを増やした、と述べている。

次に、新たに導入された点としては、スエトニウスの著作に「辻祭」と記されている、家や辻の守護神であるラレスの祭儀にアウグストゥスの権威が結び付けられて崇拜されるようになったこと、アウグスターレスの制度の導入、及びアポロ・マルス神崇拜が挙げられる。この崇拜の新しい点は、アポロ神とマルス神という古来からあった神々が、前者は法や正義、学藝、後者は力、不正に対する復讐といった抽象的な原理の表象として礼拝されるようになったことである。

このアポロ神・マルス神崇拜は、「アウグストゥスの宗教復興」の中の重要な項目であったと私は考える。それは、アポロ神とマルス神という伝統的要素に、ヘレニズム期ローマにおいて新たに出現した思想が取り込まれ、アウグストゥス時代という一つの固有の時代を最もよく表す特徴的な現象だったからである。このアポロ神・マルス神崇拜の持つ意味は後で詳しく論じる。ここではまず、ヘレニズム期ローマに新たに現れ、アポロ神・マルス神崇拜をもたらず土台となった思想について検討したい。<sup>(16)</sup>

ヘレニズム期ローマにおいて特徴的なのは、共同体の枠を超えた普遍宗教への志向及びそれに伴い個人に焦点を当てた宗教が出現したことである。その原因は、第二次ポエニ戦争(前218~202年)後のギリシャ文化の流入や市民権の範囲の拡大によるローマの社会自体の変質に求められる。

第二次ポエニ戦争よりほぼ百年後の所謂内乱期の有力者達は各々守護神を有していた。従来の公的祭儀は、特定の個人が挙行了したものであっても、それは国益のためになされたものであった。これに対して、従来の家庭でなされる私的祭儀の他に、組合(collegia)、市街区、氏族(gens)などの社会の中の小さな構成単位が、それぞれの守護神を有し、その祭儀を通じてその団体の繁栄を、公的ではなく私的に祈願するようになったのが、このヘレニズム期ローマであった。そしてスッラやカエサルやセクストゥス・ポンペイユスのような有力者達もまた、スッラはアポロ、カエサルはウェヌス、セクストゥス・ポンペイユスはネプトゥーヌスといったようにそれぞれ自分の守護神を選んで、神殿を奉獻し、自分の守護神としてクリエンテース達にも崇めさせるようになった。

重要なのは、この形の信仰が、“個人を「運命」の手から救済する”というヘレニズム時代の宗教思想<sup>(17)</sup>の延長線上にあったことである。個人の救済が、セレウコス朝やプトレマイオス朝など

のオリエントの専制君主的王朝に取り入れられると、国家共同体の頂点にいる王個人の救済が、即ちその共同体の救済になる、と考えられるようになった。ここで専制君主国家の人民はポリスの市民とは異なり、身分上は飽くまで王の所有物であり、宗教的にも首長と一致していた。この発想がローマに導入されると、それは有力者の個人的信仰という形をとって現れたのである。“有力者個人の救済”ということが考えられた時に、パトロヌスたる有力者に付き従うクリエンテースも、パトロヌスと共に救済される、という論理が考えられた。そしてスッラやカエサルのような有力者達は挙って、自らを「運命」の手から救済してくれる守護神を求めた。彼らはヘレニズム世界を支配していた“気まぐれな「運命」女神が全てを決定する”という運命史観に対して、その運命の支配からの解脱という形での救済を求めたのである。つまり、ヘレニズム時代初期の“救済”は、密儀宗教に加入した個人個人が対象であったが、時が経つ内に、救済の対象が個人から集団へと移行し、そして集団の長が帰依する守護神の力はその集団全体に及ぶ、という論理が出来上がった。この際、アポロやマルスのような旧来の神々にも救済神の性格が付け加えられて行く。つまり、これらの神々に帰依信頼することにより、運命の支配から逃れて救済を得ることができる、と考えられるようになる。その時、ローマにおいて元来のアポロ神やマルス神にはなかった要素、前者は法や正義、学藝、後者は力、不正に対する復讐といった抽象的な原理が付加されるのである。ここで、アウグストゥスのアポロ・マルス神崇拝の具体的検討に入りたい。

#### 4. アポロ・マルス神崇拝

76頁において、パラティウム丘のアポロの神殿及び復讐者マルス (Mars Ultor) の神殿に下線を引いて留意を促したが、それはアウグストゥスがその数十年の生涯に亙ってこのアポロ神とマルス神を特別に扱い、神殿を建立し、盛大な祭儀を執り行うという形で、敬意を表し続けたからである。しかしアウグストゥスがこれを特別扱いした裏には、宗教的意味が隠れていた。その意味をアポロ神とマルス神とについて探り、アウグストゥスがこの二神を併せて尊崇した理由をリーベシュツの著作に基づきつつ考察する<sup>(18)</sup>。

##### (1) アポロ神

まずアポロ神がアウグストゥス個人に対して有する意味を述べる。まずアウグストゥスの出生に関して、母アティアがアポロの神殿に参籠した際にアポロの化身と考えられる大蛇によって彼を身ごもったという伝説<sup>(19)</sup>があり、大叔父カエサルはアウグストゥスを自分の後継者として養子縁組する際に、この伝説を利用して自分の取った措置の正当性を周囲に対して主張していた。前36年にアウグストゥスが旅行中に雷雨に遭遇し、間一髪で直撃を免れた後、自分が助かったのはアポロのお蔭であるとして、神殿建立を約束した<sup>(20)</sup>。アントニウスとクレオパトラの連合軍と対決した有名な前31年のアクティウムの海戦<sup>(21)</sup>は、アポロの神域のすぐ沖合で行われ、勝利を収めたのでアウグストゥスはますますアポロに対する感謝の念を深めて、前28年にパラティウム丘にアポロ神殿を建立した。彼はパラティウムのアポロ神殿を建立した後に、今まで至高至善のユピテル神殿に保管されていた『シビュラの書』をアポロの神殿に移管したし、世紀祭では最終日にアポロ神殿に場所を移して犠牲式が献げられた。そもそもアウグストゥスはアポロの神殿があるのと同じパラティヌス丘に居を構えていた。

前28年のアポロ神殿の奉献式<sup>(22)</sup>については、カッシウス・ディオ<sup>(23)</sup>にその次第が述べられているので以下に略述する。通常、奉献式に伴う祭礼では、程度の差はあれ、祝宴 (epulum) と凝った娯楽がその土地の全住民を巻き込んで催されたが、このアポロ神殿の奉献式でも、式典の間、高貴な家柄の青少年達は大競技場 (Circus Maximus) で行われる競技に参加させられた。この祭礼は当面四年毎に執り行われると決められ、引き続き上記のような規模で、神官とト占官、七人委員 (septemviri)、十五人委員 (quindecimviri) の四系統の祭司職に執行を委任した。初回は更に、体育競技がマルスの野に建設された木造の競技場で行われ、捕虜同士の剣闘試合が催された。この行事は数日間続行された。アウグストゥスはこのようにアポロ神に対して厚い敬意を表した。

ところで、神としてのアポロが元来有していた意味も検討しておかねばならない。アポロが最初にローマに導入されたのは前431年の悪疫流行の際に「治癒神」として導入されたのであって、市内に神殿を一つ有してはいたが、それ以上の尊崇は受けていなかった。そしてアポロが元来ギリシャ本土において有していた複雑な性格も、ローマにおいては余り考慮されることはなく、専ら治癒神としての面だけが強調されて来た。このようなアポロであったが、アウグストゥス時代になると、ローマにおけるアポロ神に、突如として、元来ギリシャ本土での伝統であった要素が付加されるようになるのである。それは、平和の神、法や正義、学藝を司る文明の神、太陽神としてのアポロの要素である。その要素故に、アポロはアウグストゥスの打ち立てた新しい秩序を守護してくれる神という意味を付与されて尊崇された。

一方、アウグストゥスには、上述の個人的理由の他にも、アポロに特別な敬意を表する理由があった。アウグストゥスが氏族の長として統べており、また実際母を通じて血を引いているユリウス氏とアポロとは縁が深い。ローマには古来よりウェディオウイス或いはウェイオウイス (Vediovis, Veiovis) という冥界神があり、ユピテル又はアポロの暗い側面を現した存在であると考えられて、これらの神々と同一視されてきた<sup>(24)</sup>。そしてこのウェディオウイス神は、ユリウス氏族が古来より氏族の祭儀の対象として私的に拝してきた神である。また、アポロはヘレニズム世界においては最も有名な神の一つであり、デルポイを初めとする各地のアポロの神託は権威を有していた。そして注目すべき点は、前431年にアポロ神がローマに導入されたとき、神殿の建立を請け負ったのは、ユリウス一族の一人だったことである。つまりアポロはローマ人の最高の長であるアウグストゥスにとって、系譜的にも利用価値が高かったのである。

このようにユリウス氏とアポロとの縁は深かったのだが、アポロがローマ人の尊崇を受けた理由は以上述べて来た理由だけではなかった。当時、ホメロスの有名な二大叙事詩『オデュッセイア』『イーリアス』は、ヘレニズム世界の共通文学と言える立場を獲得していたが、ローマ人自身もその中のトロイア伝説に自らを関連づけて行くことによって、ヘレニズム世界における自らの位置付けを確立していった<sup>(25)</sup>。このトロイア伝説の中でアポロは、トロイア側とギリシャ側のどちらにも味方せず、常に中立の立場を保っていた神であった。即ち、殆どのオリュムポスの神々がトロイアの敵即ちギリシャ側に回った中でアポロのみが中立を保っていたということは、トロイアに好意的であったと解釈され、尚更トロイアのアエネアスを祖と仰ぐローマ人に親しみを抱かせたのである。尚、ローマ人は、政治的・軍事的・経済的にはギリシャを征服したと雖も、文化面ではギリシャ人に対して常に劣等感を抱いており、ギリシャに対してアンヴィヴァレントな感情を有していた。それをここで詳しく論じる余裕はないが、ローマ人がギリシャに滅ぼされた

トロイアに好意を寄せ、自らをこれに結び付けようとした裏には、このような心情が働いていたと考えられる。何れにせよ、アポロ神はこのようなヘレニズム世界共通の神話体系の中で、ローマ人に好都合な意味を有していた。

## (2) マルス神

マルスに関しては、まずアウグストゥスは、前42年のカエサルの暗殺者達を破ったフィリピの戦いの前に、戦いに勝って復讐が成就したら神殿を奉獻すると約束した。これより前第一回三頭政治の三人委員の一人であったクラッススはパルティアで戦死し、軍旗まで奪われていたが、前20年アウグストゥスはパルティアと平和協定を結び、軍旗を返還してもらおうと、クラッススの復讐が成し遂げられたとして、カピトリヌス丘に小さなマルスの神殿を献げた。そして前2年に、壮大な復讐者マルスの神殿を自分の私有地の敷地内に建立したのである。この時よりマルス神は、不正に対して復讐する神という新たな意味をアウグストゥスによって付与されて、ローマ市内に神殿を奉獻され、手厚く祀られることになった。

次に、この復讐者マルスの神殿について具体的な用途を検討したい<sup>(26)</sup>。ローマ人の神殿が有する多様な機能をよく表しているのは、前2年にアウグストゥスが奉獻した復讐者マルス(Mars Ultor)の神殿である<sup>(27)</sup>。それは、アウグストゥスがユリウス・カエサルの暗殺者に加えた復讐戦を記憶に留める意図で建てられ、又、アウグストゥスの私有地内に作られたアウグストゥス広場の建築物の中心であった。この神殿はローマの最も古い神マルスに捧げられており、様々な宗教儀式<sup>(28)</sup>が行われる場所だったが、宗教儀式と同時並行して世俗的な業務も行われる場所でもあり<sup>(29)</sup>、更には我々の目には“世俗的”と映る業務自体もそこで行われた。例えば、元老院が開戦及び凱旋式の許可を出す会議場、属州総督が自分の属州に派遣される際の儀式上の出発点、凱旋将軍が凱旋行列で身に帯びていた笏と冠及び敵から奪った軍旗を保管する場所、そして若者達が成人式を挙げる(即ち“toga virilis; トガを纏う資格を有する人”となる)会場、またアウグストゥスが外国の王子達を迎えて臣従の誓いをさせる場所として、重要な国家行事が行われる際にマルス神殿が用いられた。このことから、アウグストゥスが重きを置いていたことが窺える。以上のような世俗的業務が行われた背景には、ローマ国家の行政と繁栄に深い関心を寄せる戦神としてのマルスの役割が反映されていると考えられているが、これは、ローマ人が神の注視の下に市民的行為や政治的行為を行うという思想を有していたことを直接に窺わせる資料と言えよう。

神殿はまた博物館や広告掲示場としても機能していた<sup>(30)</sup>。マルス神殿は市の中心にあったので、そこは公的式典のためでなくても人々が集まるのに恰好な場所となった。またマルス神殿を初めとする神殿は、市民の貴重な財産の保管所でもあった<sup>(31)</sup>。一般的には、神殿は市場や金貸し取引所、美術館、図書館、集合の目印の役割を果たしていた。

ところで、マルスの元来有していた意味も検討しておかねばならない<sup>(32)</sup>。マルスはローマ古来の神であるが、実はマルスはアウグストゥス時代まではローマ市内には神殿を持っていなかった。マルスは、戦争時に戦の場で犠牲式を挙げて勝利を祈願するという性質の神であり、且つ農業の守護神であった故、戦場でも農地でもない都市においては、崇拜されるべき性質の神ではなかった。しかしアウグストゥスは戦争神としてのマルスの中に、不正に対して復讐を加える神、即ち秩序を正すために、法だけでは足りず、力を振わねばならないときに助けてくれる神という性格



を読み込み、また、外国からの安価な穀物の流入によって、オリーブや葡萄といった主食ではない副産品しか産出しなくなっていたイタリアの農業を、前三世紀半ば頃の自給自足状態に引き戻すために、農業神としてのマルスを重要視したのであった。

更に神話体系上の意味を考えてみると、トロイア伝説との関連で言えば、マルスはギリシャで言えば軍神アレースと同じであると考えられていた。そしてトロイア伝説においてはアポロ同様、アレースもまた、トロイアの味方であった。全ギリシャとトロイアとが戦ったトロイア戦争<sup>(33)</sup>において、美の女神アプロディテーはトロイアの味方であった。トロイアにはアプロディテーの息子アエネアスがいた。また、アプロディテーの夫は別にいたのだが、彼女の恋人は軍神アレースであった。従って、アレースは恋人の頼みとあって、常にトロイアの味方であった。従って、アレースと等しいと考えられたマルス神も、ヘレニズム世界共通の神話体系内では、トロイアを祖と仰ぐローマ人にとって利用価値が高かったのである。パリスの審判からトロイア戦争が生じたという神話自体の荒唐無稽さは、アウグストゥス時代の作家達も指摘している。こういった神話は、はるか昔に結んだ友好関係もしくは敵対関係が物語として語り伝えられ、また語り伝えられることによって人々の意識を規定した点で意味がある。そしてその意味が、逆に現実の国々や都市の力関係を動かしたという点において、神話は軽視できないのである。

### (3) 考察

ここで、アウグストゥスによって導入された新たなアポロ神・マルス神崇拝の特質を考えてみたい。アウグストゥスがアポロ神に与えた性格は、平和・法・正義・学藝・文明といった“文”的性格であり、それはアウグストゥスがこれから治めて行こうとしている新たな世界の秩序を守護するものであった。これに対して彼がマルス神に付与した性格は、戦争・力・不正に対する復讐といった“武”的性格であり、それは穢れ乱れた古い世界の秩序を力を以て整え、回復するものであった。

マルス神は、言わば過去を清算する力の象徴であり、アウグストゥスを原点とするならば、過去に面を向けた存在であった。アウグストゥス時代の前半には、この“過去の清算”、“過去の内乱期の穢れからの浄め”という精神的風潮が強かった。それは、内乱期を体験した世代が多く生きており、それ故、過去の罪と穢れが強く意識されていたからであろう<sup>(34)</sup>。それは、この過去の穢れを浄めるまでは、破壊され、不正なものになってしまった神々との間の関係性を、正しい関係性に回復できないという考え方が、当時の少なくともある程度教育を受けた人々の意識にあったと言えよう。ここに神々との関係性回復を謳った「祖先の良風美俗の復活」というアウグストゥスの理念が生きていることが窺えよう。

一方、アポロ神は過去を清算した後の新生した世界において実現されるべき理想の象徴であり、言わば未来に面を向けた存在であった。そしてアポロ神は、既にヘレニズム時代に物語として神話体系を受容していたローマ人にとって、神話体系上ローマ人に近いというのみならず、アウグストゥスにとって、系譜的にも個人的にも意味を有していた故、特別な尊崇の対象となり得たのであろう。

アウグストゥスは、古来より尊崇されてきたユピテル神にも壮大な神殿を奉献しているが、それは敬して遠ざけるという扱い方であった<sup>(35)</sup>。アウグストゥスの諸神に対する扱い方を見る限り、

彼はアポロ神とマルス神とに重きを置いたと言える。アウグストゥスは、様々な神々の性格を些細なものでは従来の神々に保有させつつ、国家の基本に関わる重大な要素を有している部分は、この二神に収斂させていったのであり、そしてこの二神が並んで崇拝されたということは、ここに自らが旧世界から新世界への転換点に立って、新しい時代を開こうと意識しているアウグストゥスの姿勢が窺えるのではないだろうか<sup>(36)</sup>。

## 5. 結論

従来はアウグストゥス時代が終って皇帝の代がかわると、アウグストゥスの掲げた理念も廃れ、祭儀や神官職も精神的意味を見いだせぬまま形骸化の一途を辿った、という解釈が主流であった。リーベシュツは、アウグストゥスが導入したアポロ神・マルス神崇拝も、アウグストゥスが行った一連の「宗教復興」の中では、後世に対して最も意義が低かった、と述べている<sup>(37)</sup>。アポロ神はすぐに太陽神に置き換えられ、マルス神は戦いに出発する時以外には顧みられなくなり、ローマのような都市の内部で農業神としての性格を保有し続けるのには無理があったからである。

しかし、私は逆に、アウグストゥスがアポロ神とマルス神に対して上記のような抽象的原理に進化し得るような性格を与えたからこそ、それがギリシャ哲学の有する抽象的な諸々の観念とも近くなり、また後に太陽神的性格を有するミトラ教やバアル神の導入を許す契機になり得たのだと考えたい。つまり、アポロ神からアポロという固有名詞を、個性或いは人格性を削り落としてしまったときに残る抽象的屬性、それをローマに導入したのは、まさにこのアウグストゥスであり、その点において彼の行った「宗教復興」の意義は大きいと考えられないだろうか。

尚、アウグストゥス時代以降マルス神が顧みられなくなるのは、それが旧世界の秩序の立て直しという役目を終えたからであると考えられる。

アウグストゥスは古い固有の伝統を復活させ、しかもその中に幾つかの新しい要素を盛り込んだと考えることができる。「アポロ神・マルス神崇拝」の最後の部分で述べたような分析もアウグストゥス自身は殆ど意識しておらず、現代の我々が考え出した後知恵であるかもしれない。だが、何れにせよ「アポロ神・マルス神崇拝」は、従来になかった新しいものの出現であった。そしてこの宗教的に新しい要素と、政治的・社会的体制として新しい元首政という要素と、今やローマもそれに同化しつつある所のヘレニズム世界の精神的気風とが絡み合っ、今までのヘレニズム世界には見られなかったような時代、即ちアウグストゥス時代が出現した、ということは言えるであろう。

アウグストゥス自身は革新的であるよりはむしろ復古主義的であった。アウグストゥスは独裁者の地位を望んで（若しくは望んだと考えられて）弑逆された義父カエサルを踏まぬよう、細心の注意を払い、元老院を重んじ、自分は共和政期の政治形態を変革しようとしているのではなく、社会状況の要請で仕方なく単独支配の形をとっているのだという姿勢を示し続けた。この姿勢は言ってみれば、“自分は古きものをより良い方法で守っている”という姿勢であろう。ただし彼は現実面の制度までを古来のものに戻そうとは決してしなかった。それは恐らくローマ人が“システムの有効な運用”を重視し、形態そのものに拘るような思考を有していなかったことと関連があるであろう。つまりローマ人自身も、アウグストゥスと同様に、ローマ国家という一つのシステムが有効に運用されればよいと考えたとと言える。何れにせよ、ここに、アウグストゥス自

身の統治理念、「祖先の良風美俗の復活」が、政治的にも宗教的にも生きていることが明らかになるであろう。

この「アウグストゥスの宗教復興」が後世に与えた影響はどのようなものであったのだろうか。アウグストゥスの事業は本当につかの間の成功だったのだろうか。勿論、長期的に見た場合、属州出身の皇帝の出現<sup>(38)</sup>、太陽神＝ミトラ系の宗教の持つ求心的傾向の利用<sup>(39)</sup>など、ローマ社会の表層は様々な宗教が交替に現れた様子を見せるであろう。しかし、社会全体を視野に入れた場合、単一の宗教に社会全体が染め上げられたなどということは、価値観の異なる集団を多く内包する帝政期のローマ社会の場合には考えにくい。「アウグストゥスの宗教復興」はアウグストゥスの時代につかの間に咲いて散った徒花というわけではなく、後の時代にまで社会の深層に沈澱して通奏低音のように精神的影響を与え続けたように思われるが、この点に関しては紙面の都合上別の機会を待ちたい。

## 註

- (1) エリアーデも『世界宗教史II』の中で (p.143) も同様のことを指摘している。
- (2) 最近西洋史学の分野で、毛利晶氏がアウグストゥス時代のローマ市の街区で祭られた祭神の研究を通して、当時の宗教政策を解明しようとしておられる。
- (3) 宗教学辞典“政治と宗教”(阿部美哉)の項参照。
- (4) 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』64頁参照。この問題に関して弓削氏はクルト・ラッテの議論を下敷きにしておられる。
- (5) 「宗教復興」という呼称は、英語では (religious) “restoration”, “reform”, “revival” と表される。しかし、“revival (リバイバル)” という用語には、近現代の欧米のキリスト教文化の中で生じた、熱狂的な説教や賛美歌、集団的な回心体験を伴う宗教運動のニュアンスが濃いので、この語を用いると誤解を生む恐れがあり、使用を避けることにする。他方、“reform” という語を用いる場合、どちらかというところ“刷新”“改革”のニュアンスが強調される。だが、私が「アウグストゥスの宗教復興」という表現で指している一連の事象を観ると、“何かを改め、新たに興す”というよりは、“かつてあったものを再び興すという色合いが濃いようである。それ故、本論文では日本語訳として「宗教復興」という用語を当てることにした。勿論この“復興”の語も、ただ“かつてあったものが再現された”というニュアンスだけでなく、“かつてあったもの”の意味が時代の流れに沿って変化を被り且つ再構成された”という意味が包含されたものである。
- (6) C I L ; Corpus Inscriptionem Latinarum (『ラテン碑文集成』)
- (7) 『神君アウグストゥスの業績録』(スエトニウス『ローマ皇帝伝』国原吉之助訳(上巻))は碑文であり、アウグストゥスの死後、自筆の本文をティベリウスが校訂し、標題をつけて青銅板に刻み、故人の希望どおりにアウグストゥス霊廟正面の一对の門柱の四面にはめ込んだものであろうと推測されている。現存するアンキユラ碑文から推測する所では元の標題はもっと長く、『神君アウグストゥスが、ローマ国民の統治権の下に世界を服従させた業績と、彼が国家とローマ国民のために負担した経費』(Resgestae divi Augusti, quibus orbem terrarum imperio populi Romani subiecit et impensae, quas in rem publicam populumque Romanum fecit.) というものであったらしい。アポロニアはガラティア属州の一地方ピシディアのアンティオケイアに近い町であり、十九世紀から本碑文の断片がみつかった。アンティオケイアはアウグストゥスの植民市であり、1914年に本碑文の最初の断片が発見された。
- (8) 古代社会においては、特に宗教が政治権力を代表とする世俗の力と対立関係に立ってはいない社会

の場合、政策一つをとってもどこまでが政治的でどこからが宗教的なのか、判別しにくいものである。特にローマの場合、後述するように、第二神殿時代のユダヤとは異なり、閉鎖的な世襲の祭司階級が形成されていたという訳ではなかった故、「祭りごと」と「政」との境界線を引くことは難しい。本論文では、従来の諸研究が宗教的と見なしてその観点から扱って来たものを、従来の立場を踏襲して扱う。

- (9) エリアーデは、この傾向はローマ人が「インド・ヨーロッパ諸民族の神話的テーマや神話・儀礼的シナリオの「歴史化」」を行っていることと深く関連すると述べている。エリアーデ『世界宗教史』120頁参照。なお、レリギオー、ピエタースに関する議論については、デュメジル、エリアーデ、ケレーニイを主に参照した。
- (10) エリアーデはアウグスティヌスの『神の国』から次のような例を引いている；「人々は、新生児が泣いたりしゃべったりするのを手助けしてくれるようにヴァティカヌスとファプリスに祈りを捧げ、(その新生児が)食べたり飲んだりについてはエデュカとポリナに、歩くことについてはアベオナにといったぐあいに祈りを捧げた。」(邦訳122頁)
- (11) エリアーデ前掲書123頁。
- (12) ケレーニイ『神話と古代宗教』189頁。
- (13) ケレーニイ前掲書161頁。尚、大プリニウス『自然誌』7-121, ウァレリウス・マクシムスの5-4-7に詳細がある。大プリニウスの記事は以下の通りである；ある平民の、名前も分らない程身分の低い女性がいた。彼女は丁度子供を産んだばかりであった。その女性の母は何か罰を受けて、食べ物を与えられずに牢獄に閉じ込められていた。娘は母の所へ毎日通ったが、扉の所には食べ物を与える者を差し止めるべく、番人が配置されていた。そして終に娘が自分の乳を以て母を養っているのが発覚した。この奇跡的な事態が明るみに出た時、娘の敬虔な (pietati est) 愛情は、母の釈放と終生の生計の保証とを以て報われ、その牢獄があった場所にはピエタース女神の神殿が建立された。
- (14) 同161頁。
- (15) タキトゥス『年代記』の附録(三)において、国原吉之助氏は帝政期初期の国家財政の歳出の中の祭費の部分で、ローマ祭七十六万セステルティウス、アポロン祭三十八万セステルティウス、という数字を挙げている。氏の挙げている祭儀が具体的にどの祭儀を指しているのかは分らなかった。
- (16) 以下の議論は、Dumézil, G., Archaic Roman Religion, vol.2を参照している。
- (17) エリアーデ前掲書294頁以下参照。
- (18) Liebeschuetz, J.H.W.G., Continuity and Change in Roman Religion, pp.82.
- (19) スエトニウス『ローマ皇帝伝』第二巻94節参照。
- (20) カッシウス・ディオ第四十九巻15節
- (21) アクティウムはギリシャ西岸のアンボラキコス湾の入り口にある土地で、前31年にはアントニウスの野営地があった。ここは少なくとも前五世紀よりアポロの神殿があった。アウグストゥスはアクティウムの海戦に臨んでアポロの神域に近いことを幸先よいと喜んでいて。
- (22) 以下の議論は、Stambaugh, John E., The Functions of the Roman Temples, 1978. (ANRW II, 16:1, pp.554-608) の p.557-568を参照している。
- (23) カッシウス・ディオ53-1参照。
- (24) ケレーニイ 前掲書 第六章 (邦訳241頁)
- (25) ローマを初めとするヘレニズム世界における初等教育では、読み書きの教材としてホメロスの詩も用いられていた。
- (26) 以下の議論は、Stambaugh, John E., The Functions of the Roman Temples, 1978. (ANRW II, 16:1, pp.554-608) の p.554-6を参照している。
- (27) カッシウス・ディオ第五十五巻10節は欠落部分を含んでいるが、マルスの神殿奉獻について述べて

- いる。
- (28) アウグストゥスは、この神殿で毎年祭典が騎士階級の指揮官達 (seviri equitum) によって挙げられるように定めた。国家の祭典の時は皇帝自身が犠牲式を司った。またマルス神の舞踊神官集団(サリイ (Salii)；前述)も神殿で儀式を挙げ、そしてそこで手の込んだ饗宴を催した。
- (29) スエトニウスは、皇帝クラウディウスの美食家振りを揶揄した箇所、アウグストゥス広場で訴訟を審理していたクラウディウスが、ある時、同じ時にマルス神殿で行われていた神官の祝宴から立ちのぼる良い匂いに引かれ、席を立てて神殿へ入って、神官達と共に饗宴の長椅子に横臥してしまった逸話を述べている。(スエトニウス『ローマ皇帝伝』第五巻33節参照。)
- (30) 神殿の扉の浮き彫りと軒縁の碑文には、アウグストゥスとアエネイス、ロムルス、マルスとの関係が述べられていた。また『神君アウグストゥスの業績録』にも記載がある、パルティア人から取り返した軍旗を陳列することを以て、アウグストゥスの外交上の業績を示していた。後代にも、カリギュラは暗殺未遂者達から奪った三振りの剣を奉納し、ネロは自分の像をマルスの像と同じ大きさで建てて奉納した。
- (31) ユウェナリスはこのような個人が神殿に預けた品を盗む近頃の盗人のことを記しており、そして彼は泥棒が終にマルス像から兜を盗んだので、その結果人々は銘々の貴重品をカストル神殿に預け代えるようになった、と述べている。(ユウェナリス第十四巻261-263節参照。)
- (32) Liebeschuetz, J.H.W.G., Continuity and Change in Roman Religion, pp.86.
- (33) そもそもトロイア戦争の起こりは、アテナ、ヘーラー、アプロディテーの三女神が美を競い、オリュポスの神々が調停しようとしても収拾がつかず、結局トロイアの王子で、里子に出されて牧童をしていたパリシに審判させることになり、それぞれの神の特質に見合った魅力的な報酬を以てパリシに迫るが、“世界一の美女を与えよう”と約束したアプロディテーにパリシは軍配を挙げたので、アプロディテーは約束どおり、スパルタのメネラオス王に嫁していた世界一の美女ヘレネーをパリシに与え、トロイアへ奪って行かせた結果、ギリシャとトロイアとの間に戦争が起こった、というものであった。
- (34) アウグストゥスが行った祭儀の中で、過去の浄めという意識が強かったものの一つに世紀祭がある。リーベシュツの議論によれば、世紀祭は詩人ホラティウスの讃歌からも窺えるように、まさに穢れた過去を浄めて、神々との関係性を回復し、併せて今後の加護を願う意図があった。世紀祭について論じるのは別の機会を待ちたい。
- (35) 貨幣の図像にユピテルが用いられたのは帝政の始まる以前であり、帝政開始後は殆どがアポロの図像であったことから、アポロが重視されたことが読み取れる。
- (36) この点に関しては、エリアーデが、ヴェルギリウスの『牧歌』を基にして新時代を開いたアウグストゥス像を論じている。
- (37) Liebeschuetz, J.H.W.G., Continuity and Change in Roman Religion, pp.88.
- (38) 五賢帝時代の五人の皇帝のうち、第二番目のトラヤヌス帝(在位98-117)と第三番目のハドリアヌス帝(在位117-138)は属州ヒスパニア(現スペイン)の出身である。また三世紀初頭のセウエルス朝を開いたセプティミウス・セウエルス帝(在位193-211)は北アフリカ出身であったと伝えられている。
- (39) コンモドゥス帝(在位180-192)は自らをヘラクレスの生まれ変わりや信じたうえにミトラ信仰に入信し、エラガバルス帝(在位218-222)はシリアの太陽神信仰をローマに大々的に持ち込んだ。

## 参考文献

1. 一次文献 (Loeb Classical Library を参照。)
- Dio Cassius, Roman History, (『ローマの歴史』)
- Horatius, Carmen Saeculare, (『祝祭讃歌』)
- Res Gestae Divi Augusti, 『神君アウグストゥスの業績録』 国原吉之助訳
- Suetonius, De Vita Caesarum, 『ローマ皇帝伝』 国原吉之助訳 岩波文庫 1986年
- Vergilius, Eclogae, (『牧歌』), Aeneid, (『アエネーイス』)
2. 二次文献
- Altheim, F., Römische Religionsgeschichte, Baden-Baden, 1933. repr. 1951.  
A History of Roman Religion, London, 1938. (上記の著作の英訳)
- Dumézil, G., Archaic Roman Religion, translated by Philip Krapp, Univ. of Chicago Press, 1970.  
(La Religion romaine archaïque suivi d'un appendice sur la religion des Etrusques, Paris, 1966. の英訳)
- Eliade, Mircea, Histoires des croyances et des idées religieuses, Paris, 1978.  
『世界宗教史』 島田裕巳・柴田史子訳 筑摩書房 1991年
- Kerényi, K., Die Religion der Griechen und Römer, London, 1962.  
『神話と古代宗教』 高橋英夫訳 新潮社 昭和47年
- Latte, K., Römische Religionsgeschichte, München, 1960.
- Liebeschuetz, J.H.W.G., Continuity and Change in Roman Religion, Oxford University Press, 1979.
- 毛利 晶 「所謂「アウグストゥスによるラレス祭儀の改革」とローマのウィーコマギステル」 『史学雑誌』 100-3, 1991年
- Ogilvie, R.M., The Romans and their Gods—in the age of Augustus—, Chatto & Windus, London, 1974.
- ペロン, S., 『ローマ神話』 中島健訳 青土社 1993年
- Rose, H.J., Religion in Greece and Rome, NY. first published 1948.
- 塩野七生 『ローマ人の物語』 I・II・III 新潮社 1992, 1993, 1994年
- Stambaugh, John E., The Functions of the Roman Temples, 1978.  
(Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt Berlin and New York ,16:1)
- 弓削 達 『ローマ帝国の国家と社会』 岩波書店 昭和39年

## **The Augustan Revival** **— Religion in the Age of Augustus —**

Keiko KOBORI

The Augustan Revival refers to the religious policy of the Emperor Augustus who was responsible for restoring traditional religion to his empire. "I restored many traditions of our ancestors"<sup>1</sup> summarizes the intent of his policy, one which promoted the reconstruction of ruined temples, the restoration of moribund rituals, and generated several cults. One such newly established cult of the time was that of Apollo and Mars. Augustus maintained special devotion to Apollo and Mars, and dedicated magnificent temples and splendid ceremonies to each deity throughout his life.

There is a deeper meaning of these cults. First, Apollo, who had been a mere god of healing in the republic, was given a new role as protector of peace, justice, law, literature and the arts. Augustus thus used Apollo as a symbol to protect the new world-order over which he ruled. Since Augustus considered Apollo his personal protector, he presented himself as one assisted by Apollo in the restoration of the Golden Age.

Second, Mars, too, who had once been, but a god of war and agriculture, was given a new role as avenger to right the unbearable wrongs of the Former order. Augustus used Mars as a symbol to purify a Rome profaned by civil war, and to "restore many traditions of our ancestors" as a means of reestablishing rapport with the gods.

Augustus therefore believed that he was standing at a historical turning point, and recognized himself as the creator of a new age.

N.B.1. cf. RES GESTAE DIVI AUGUSTI chapter 8. (Loeb No.152 p.359)